関与した。極東委員会（SCAP）と東京に設置されたカナダ代表部（リエーゾン・ミッション）（または連絡ミッション代表）である。

極東委員会は、GHQの対日管理にさまざまな間接的影響を与えた。そのおもなものに、憲法改正、労働運動の合法化、民主教育、市民の自由の確立、経済的非軍事化および独占の排除、賠償、戦争犯罪人に関する裁判と処罰等々に関する問題があった。カナダ代表はこれらすべての討議に参加したが、とりわけ憲法改正問題では重要な役割を演じた。改正に関する基本方針案を打ち出すことになっていた同委員会では、各国の代表はまちまちに「絵に画いた餅」のような提案をなし、自国の意のままに日本を創り変えようとした。たとえば、アメリカはとくに三権分立の重要性を、ソ連は社会主義憲法を、イギリスは議員内閣制を、オーストラリアは天皇制の撤廃を強調した。この会議で議長を勤めることが多かったカナダは、齟齬する列強の意見とりなしに並々ならぬ努力を払った。日本国憲法は「マッカーサー憲法」とも呼ばれているが、極東委員会のこうした意向はSCAPにも伝達されており、右記の各主張はうまく調和を保って日本国憲法に反映されることとなった。

限られた紙面に極東委員会でのカナダの活躍を述べることは、列挙するさえ困難であるが、カナダは一般にイギリスと協調して、日本に対し寛大な態度（たとえば、賠償、戦犯、軍事的経済体制――同委員会ではどこまでが「軍事的」かが一つの争議の的であった――の破壊等に関して）をとった。また、きびしい対日態度を示すソ連、オーストラリア、ニュージーランド、フィリッピンと、独走しようとするアメリカの間、あるいは、ことごとに対立する各国代表間に介在して、つねに調停役をかってでたことも、カナダの一つの重要な貢献であった。一九四七年七月、極東委員会が「降伏後における対日基本方針」を公表した際、マッカーサー最高司令官は「これは近代史に残る偉大な文書の一つである。十一か国が多種多様な主張に分かれて、互いに融和することは不可能ではないかとの恐れは、これによって一挙に吹き飛んでしまった」と感嘆した。そこへ漕ぎつけ得たのには、カナダ代表（とくにレスター・ピアソン首席）の寄与が大きかったことを見逃してはならない。

在日カナダ代表部の初代首席（一九四六～五〇年）は、安藤昌益の研究や「日本における近代国家の成立」等の著作で高名なE・ハーバート・ノーマンであった。彼は豊富な知識をもつ日本専門家として、マッカーサーがもっとも信頼した数少ない相談役の一人であり、GHQの占領行政のうち、とくに民主教育、農地改革、労働運動の合法化にはノーマンの影響があったとみられている。けれども彼は、日本の文化的伝統の秀れた部分まですべて破壊して、日本を完全に「アメリカ化」することには反対であった。一国の政治、

ハーバート・ノーマン（大窪愿二氏提供）

✿私と カナダ✿

深まる日加交流の展望

日本経済新聞社トロント特派員
橋田　忠明

「冬を知らずして、カナダを語るなかれ」――。今、カナダは白銀の世界の中にある。日本から初の新聞社特派員として、トロントに常駐して、もう一年。会見を通じて知己を深めたカナダ要人たちは、私に誰もがこう冗談めかして忠告してくれたものだ。

五ヵ月もの厳しい雪に埋もれた生活。人々は仕事を終えると、家庭に直行、暖炉を囲んだ語り合いや、地域社会の各種クラブで人間的な交流を深めようとする。休日に南へ逃避する人々も多い。どんなエライさん(?)も、こと家庭やワイフのことになると、肩をすくめて見せる。冬をいかに過すか、そして、春を待望する心……。高度消費社会を実現しながら、半面では、先進国中の〝発展途上国〟と評される若いカナダの断面がここにも見てとれる。

カナダは、日本では「森と湖の清らかな国」のイメージが強く、昨夏は観光プームを呼んだ。米国や欧州各国に比べると、いまなお遠い国だが、ゆっくりながら着実に、独自の姿を世界の中で浮かび上がらせつつある。

先進七ヵ国メンバーの一国にもかかわらず、日本でカナダ関係の本は少ない。トロントで取材の第一線に立った時、驚きを覚えたのは、今度はカナダの人たちの「日本知らず」だった。アジアと言うと、すぐ中国を連想するカナダの一般大衆は、じっくり語ろうと日本に深い興味を示すのに、それは「自動車や電器製品に代表される国」だった。報道に日本関係は少なく、家庭交流で知り合ったカナダのある友人は「残念ながら、学生時代に日本について習わなかった」と言い、根が教育にまでさかのぼる点を示唆してくれたものだ。

だが、にごりなく見ると、その点に日本とカナダの次の時代や課題が象徴されているようだ。取材や家庭のつき合いで知るカナダ人の多くは素朴で、親切で、少し〝照れ屋〟である。人によっては、それが「カナダ人は融け込みにくい」との感想になる。が、俗に言う〝するめの味〟である。つき合ううちに、彼らが人なつっこく、しかもよく観察しているのに、こちらが言い出さないと奥ゆかしく黙ったままの側面につき当たる。日本人の国民性に通じる点をかい間見るのだ。

だから、この一年は日本を知らせ、カナダを知る一年だった。標語風に言えば、こうなる。「経済は米国流、生活・文化は欧州流」、「人々は国よりまず町や州、そして出身国」、「外交は国内問題（移民が多く、世界の出来事はカナダの各移民社会にはね返る）」、「何が起きても、資源があるさ」――。確かに、住んで見ると、カナダの社会にもダーティな一面や、無知からくる偏見もある。アト・ランダムに感じるまま挙げたが、予想以上に動く